

# 絵本からイメージできる音表現の追求

寄 ゆかり\*

Pursuit of the sound expression that I can image from a picture book

Yukari Yori

---

【キーワード】音楽表現, 「保育内容・表現」, 幼稚園教育要領, 領域「表現」

## 1. 問題の所在と目的

保育5領域において「表現」として保育現場で行われている表現活動は様々である。言語表現、造形表現、身体表現、音楽表現など、その表現方法はそれぞれが独立して成立するものではない。しかし実際は、保育者養成校においては、教員の専門分野ごとにそれらの教科を開講し、それぞれに専門知識を習得する形で進められていることが多い。筆者の勤務校においても同様で、その総合的な科目として「保育内容・総合表現」を開講し、劇づくりを行っている。そこには多くの表現方法が含まれている。しかし一方で、劇づくりもひとつの「表現活動」であり、その科目を受講しているだけで、あらゆる表現活動を網羅しているわけではない。表現活動とは、そのあらゆる形があるべきではないか、あらゆる表現方法に気づく、目を向けられる保育者を養成するには、どのような授業展開を行うべきか、という観点から、研究授業を実施することとした。あらゆる形がある、ということは、以下の方法も一方法であるにすぎない。しかし、その視点のひとつとして、現在の劇づくりのみで完成していると理解するのではなく、常に表現の無限の広がりを意識すべきであると考えている。

筆者は音楽教員であるため、音楽からのアプローチとして行っているが、音楽にも様々な表現方法がある。特に保育者養成校において、ピアノなどの鍵盤演奏は、ほぼ必須となっており、筆者もこれまで鍵盤演奏表現の研究も行ってきているが、音楽表現とはピアノ演奏だけではない。ピアノの演奏表現にのみ頼るのではなく、音楽表現としてどのような在り方が考えられるの

---

所属および連絡先

\* 大阪千代田短期大学

かを模索し、次の授業展開を試みた。また音楽表現からのアプローチであるが、そこから生まれる新たな表現への気づきにも注目したい。

なお、対象学生には、本研究の主旨及び学会発表、掲載等の実施を事前に説明し、承諾を得ており、倫理的配慮を行っている。

## 2. 実践の方法

以下の方法で、研究授業を実施した。

### (1) 研究授業

授業タイトル：「絵本の読み聞かせに有効に働く音楽の導入 ～音表現の方法～」

時 期：2017年8月～2017年9月（全10回）

対 象 学 生：音楽（ゴスペル・アンサンブル）ゼミ 1、2回生 20名

本学生集団は、筆者の担当するゼミ学生である。本ゼミは、ゴスペル・アンサンブルゼミとして、ゴスペル曲や合唱、また、アンサンブル曲についての楽曲研究を行っているが、幼児教育で行うゼミとして保育現場に活かせる音表現との繋がりも研究の1つである。

音楽のゼミを選択した学生たちであるが、決して音楽が得意な学生のみでなく、「音楽が好きである」「音楽が苦手なので克服したい」といった学生もおり、今回「音表現」としたのも、様々な音楽表現は、音楽とするだけでなく「音」として追求できるものでもあるため、ここではそのように表現している。

具体的な展開方法：ゼミ生を1、2回生混合の任意のグループに分け、グループごとに絵本に音表現を入れた作品を制作し、後期授業1回目のゼミ時間に発表する。

### (2) 展開するにあたっての事前指導内容

#### ①絵本の読み聞かせと絵本の選択

絵本の読み聞かせ等では、学生はこれまでも多くの絵本と出会っている。特に2回生においては、ジャンル、対象年齢、種類（ストーリーを中心としたもの、色彩、しかけ絵本）なども含めて、幅広く読む経験を重ねてきている。そのため、まず始めに2回生が1回生に絵本を紹介すること（読み聞かせ）を実施した。

- 1) これまでの他の授業（児童文化や保育内容「言葉」等）においても、読み聞かせの手法や内容の把握、「子どもに伝えたい内容」「ねらい」は、との観点で学習は行ってきた。また読み聞かせの手法についても、多くの方法があるため、「絵本の創造性を損なうため、

音を入れるなどはしない。読み手の聞かせ方だけで、子どもに伝えることが最も大切」との指導法もあることも認識しているが、今回はそれとは異なった授業タイトルの趣旨の観点で行うことも伝えた。

- 2) 本日からの取り組みでは、「音があることによりさらに興味、関心の高まる絵本の読み聞かせとは」「効果的に音を入れるには」との観点から絵本を見る。音を入れることにより、絵本がさらに豊かに広がることを目的とした場合、どの絵本を取り上げたいかをグループで検討する。

## ②楽器の演奏法

通常のゼミ活動では、歌が中心であることが多く、楽器を鳴らすということは、あまり経験していない。他の音楽の授業（本学でいえば、「幼児の音楽表現」や「器楽活用法」などで、楽器の奏法としては学習しているが、演奏曲に合わせた楽器の奏法が中心であり、楽曲のないものに対する楽器の使用法については、どのような使用をしてもかまわない、との指導を行った。また、音楽室にある楽器はすべて使用してよいし、欲しい効果音が表現できるものがあれば、楽器でなくとも（音楽室にあるものだけに限らず）発音できる場合は、それを使用してよいこととした。それ以外にも、「新たな発見」は大いに見つけてほしい、と指導した。

以上の事前指導を実施し、その上で今回は、「グループ活動による表現への気づき」も目的としているため、特に制作段階では、指導者からは助言しないこととした。

## 3. 実践とその結果

### (1) グループごとの制作過程と発表

これまで、1、2回生合同でゼミ活動を実施してきているが、小グループでの活動は今回が初めてである。また、今回は音楽経験の濃淡には影響がないと考え、機械的に4グループの1、2回生混合として分け、編成した。

以下、各グループの制作状況と発表後の学生レポートを記す。

### ①1グループ

絵本：なつのおとずれ（作：かがくい ひろし）

- 1) 絵本の選択では、学生たちがこれまで読んだことのない新しい本を中心に選択し、読み聞かせを実施していた。その結果、全員一致で決まったとのことであった。
- 2) 音をつける作業では、場面にあった楽器をいろいろ鳴らした上で選択していた。場面場面にこだわった発表になっていた。しかし、音にこだわった場面とそうでない場面との差が激しく、全体のバランスとしては改善事項のひとつとして挙げられると感じた。

3) ピアノの得意な学生がいたため、ピアノを中心とした音表現が多いように感じた。

**【発表した学生レポートより】**

- 1) 発表のギリギリまで打ち合わせをして、完璧な状態で発表することができませんでした。時間配分から、うまく使っていないとけなと感じた。
- 2) 発表の時も、楽器と楽器の移動に時間がかかって、本との間のバランスが取れなかった。それぞれが自分の思いで動くことにより、まとまらない部分があった。

**② 2グループ**

絵本：おちばきょうそう（作：白土 あつこ）

- 1) 絵本の選択では、グループ全員が、目標を持ち、「こういう観点で探そう」と集中していたのが印象的である。
- 2) 実際に音をつけると思うようには表現できなかったようであるが、試行錯誤を繰り返している様子が見られた。その結果、固定概念で進んでいた「楽器の奏法」ではないものを、自分たちで発見できたことに喜びを感じていた。
- 3) このグループは、楽器演奏が得意な学生がいないため、逆に演奏ができるといった学生に頼ることなく、全員で音表現する楽しみ、間を感じながら発表を行っていたように感じた。

**【発表した学生レポートより】**

- 1) 絵本の選択では、「音をつけやすい絵本であるか」「面白い展開があるか」という視点から、工夫しながら選択した。
- 2) みんなで話し合いながら、音の発見をたくさんすることができた。
- 3) 落ち葉の音を表現する時には、一つの楽器だけで表現するのではなく、多くの種類を重ねて発音することで、イメージを表現できたと思う。

**③ 3グループ**

絵本：きいちゃんのどんぐり（作：おおしま たえこ）

- 1) 絵本、音という以前に、グループワークとしての全員のまとまりに時間を要した。そのため、絵本の選択段階での決定が遅かった。
- 2) 結果的には、発表までの時間が迫ってきたため、何とか間に合わせた感じであったが、もう少し時間があれば、「目指す音」が探せたように感じる場面が数ヶ所あった。
- 3) 選択した絵本は、音を入れることによりさらに効果的になるのでは、と他のグループからも意見が出る興味のある絵本であった。

**【発表した学生レポートより】**

- 1) 時間が足りなかった。絵本がなかなか決まらず、最終的には、時間がない中で、慌てて

絵本を決定した。もう少し吟味すべきだった。

- 2) 絵本自体は面白いものを選べたと思う。しかし、音を考える時間が足りなかった。次にやる機会があれば、音をつけることに時間をかけられるようにしたい。

#### ④ 4 グループ

絵本：きのいいサンタ（作：さとう わきこ）

- 1) 絵本の選択の段階では、スムーズに決定したと思われる。学生同士が意見を交換できる状況にあることが、グループワークとしての進行にも大きく関わっていると感じた。
- 2) 学年でピアノが最も演奏できる学生がいるため、「音表現」がピアノ演奏でほぼ行われていた。
- 3) ピアノで音をつけることよりも、演奏を中心としたものになり、例えば絵本の読み聞かせに注意を払い、効果的に音が働いていたか、という観点では、製作されていなかったように感じた。

#### 【発表した学生レポートより】

- 1) 最初がなかなか進まなかったため、時間不足であった。そのため、合わそうと思っていたところなどが、抜けてしまいました。
- 2) 本番になって、(後ろで演奏しているので) 絵本が見られないということがわかり、どこで入るのかもわからないような曖昧な発表をしてしまいました。このことには、絵本の内容や流れを事前に把握するなど、準備をすることができたと思います。
- 3) 音がピアノ中心だったので、もっといろいろな種類の音があった方がよかったと感じました。

### (2) 実践からみられた効果

#### ① 音で表現すること

「何をどのように使っても構わない」と指示したことで、逆に制限がないので、音の選択に苦慮している学生やグループが多かった。しかし、そこで新たな発見をしていた。音楽室にあったがこれまで触ったことのない楽器（スリットドラム、ラチェット、マルチトーンタンク、ジャンベなど、主に音楽療法等で使用する楽器が多かったため、そのコース授業以外の学生があまり通常触れる機会がなかったものが多かった）を鳴らしてみている。まず鳴らし方がわからない、と指導者に質問がきたが、「壊さなければ大丈夫だから、自由な音の鳴らし方をしてごらん。」とアドバイスをした。すると、「へー、こんな音鳴るんや。」「これ、あの場面で使われへんかな。」と目を輝かせながら話し合い、実際の音を鳴らしていた。絵本に音を入れていく過程であったが、新しい楽器に触れることによる喜び、鳴らし方を工夫しているその表情からは、

「表現の喜び」「楽しさ」が見られた。幼稚園教育要領における領域「表現」のねらい「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」ことを学生自身ができたのではないかと思われる。

またこれは、平成30年4月より施行される幼稚園教育要領他に示される「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」にもあるが、「豊かな感性と表現」「言葉による伝えあい」「思考力の芽生え」とも通ずるものである。保育者としてその感覚を身につけることが必要であり、学生が保育現場に立った時にも、表現の一方法として理解してほしいことであることは、まとめの時に伝えた。

また、今回「音表現」としたが、学生の多くは、楽曲を挿入するイメージが強く働き、既成曲を使用する場面も多くみられた。既成曲と場面とを結びつけることもひとつの表現である。しかし、楽曲に頼り過ぎること、絵本に8小節、16小節といった長いフレーズを挿入することにより、絵本のイメージを損ねることにはならないか、という振り返りは行った。そこでは、「1曲を弾き通さなくてもいいのか。」と気づき、今回のテーマに沿った挿入の方法であれば、そこにこだわることはない、という意見が多く出された。

グループによっては、絵本を選択する段階で「お話に擬音が多く出ていたら合わせやすい。」と、選択したところ、「擬音ばかりに合わせるだけでは、音を入れることによる効果はあまり感じられない。」と絵本の再検討を行い、別の絵本にしたグループもあった。この気づきも大きな成果だと感じている。「台詞に合わせた音表現」をするばかりでなく、「音も含めて絵本をどう構成していくか。」ということに気づいている。言葉に音を合わせることを同じタイミングで繰り返すことによる効果は少ないとの結論である。

音表現に関しては、グループにより大きく分かれた視点があった。それは、ピアノの得意な学生がいるグループでは、ピアノを主体として音表現していく、ということである。逆にピアノの得意な学生のないグループの方が、楽器の工夫が見られた。これは、「保育内容・表現」を担当する教員としても課題を感じた。現場の保育者もそうであるが、音楽＝ピアノという意識が未だに強いのである。実際の発表を見てから、ピアノを主体とした音表現を行ったグループのメンバーから、「ピアノに頼り過ぎていた。」「他の楽器をもっと入れたほうがお話が豊かになったと感じる。」との意見が出された。しかしこれも、発表を行ったうえで感じられたということでは、この実践は効果的であったと考察している。

音楽教員としては反省すべき点がもう一点ある。それはこの実践において、まず始めに「欲しい効果音が表現できるものがあれば、楽器でなくとも（音楽室にあるものだけに限らず）発音できる場合は、それを使用してよいこと」としていたが、使用したグループはなかった。これは、「音を鳴らすもの」＝楽器のイメージを、私たち音楽教員が植え付けていることではないか、と思われる。通常の音楽授業では、楽器の奏法などの力を身につけているが、「表現

する喜び」を味わうこと、例えば乳幼児が、自分の発する音で遊んでいる姿などから考えると、豊かな発想を持ってほしい、そのためには固定概念を覆す取り組みが必要だと感じた。

## ②「グループ活動による表現への気づき」の観点より

まずグループワークを行うにあたっては、通常のゼミではひとつの楽曲を歌うことや、その楽曲のルーツや構成などの研究を行うことから行っており、今回の取り組みの中での学生は「自分たちで考え出す」というところで、苦悩している場面が多くみられた。「参考楽譜をください。」「見本を示してください。」という意見も聞かれたが、あえてそれを行わず、「今回、全グループが発表したことから考えてみよう。」と投げかけた。そのため、グループ結成当初は、何もできずにため息ばかりついている学生たちが多くみられたが、そこにも手を差し伸べることなく時間ばかりが過ぎて行った。その中で「とりあえず何でもいいから音つけてみる?」「音入れたら邪魔やな。」「音ないほうがいいかな?」など、意見が出されていく、学生同士の変化が見られた。

その生成過程において、「絵本に音をつける」ことを目的として行った活動であったが、音を入れる事よりも、ほぼ全員の学生が気づいたことが「間」の取り方であった。そこには、楽器をどの段階でどこに準備しておくのか、読み手とのタイミングですぐに入るのか、少し待ってから入れるのか、など、音を合わせるのか、台詞の後に入れるのか、自分たちの発表からはもちろん、他のグループの発表を鑑賞する中での気づきがあった。この「間」に対する学生の感覚は、今回の発表をすることにより、気づけたことであった。普段のゼミ活動の中では、音を鳴らすことに意識はあっても、「間」を感じるということは、意識が働いていないように感じている（もちろん、流れる音楽の中で休符やブランクを感じることはあったとしても、それは一定のリズムが根底に流れている上でのことであるので、「間」の気づきとは異なると考えられる）。この「間」の表現という点では、多くの学生が「時計では測れない空気間」「息使いかな。」と、表現する意欲を感じていた。

また、絵本の読み聞かせの時、お話の内容よっての読み方、声の高さ、テンポにも留意すること、鑑賞している学生には絵本に集中させるのだが、それでも読み手の表情はお話の内容よって、どのような顔の表情で行うのがよいのか、など、音表現を主な目的としながらも、言語表現、身体表現その他、多くの表現方法があり成立しているのである、ということを感じ取っていた。特に自分のグループ活動だけでは見えない、「相互の発表による鑑賞、観察」により、省察できた事柄が多いと考えられる。発表者、鑑賞者相互の相乗効果により、さらに緊張感がある中でも、その絵本の伝えたいことやイメージしてほしい音を示す、伝えるにはどう表現したらよいのか、と常に考えながら表現しようとする意欲が見られ、これらのことが効果的に働いている場面も感じられた。これは普段、自らが「絵本の読み聞かせ」を練習している

だけでは生まれない表現力にも目を向けることができた瞬間であったと思われる。

#### 4. 終わりに

今回、ゼミ活動の中での「音表現」であったが、上記に示すような効果が認められたと考えている。学生の音に対する意識（音楽はピアノでないとできないわけではない、楽器の奏法やメロディーへの固定概念を覆すなど）の変革も、今回の活動があったことで明らかにされたと考えている。「音表現」と示したことで、学生の表現活動の視点は、「音楽」のみに注目された。また、音楽ゼミでの活動であったため、それは特に音楽に特化したものだとして学生自身も意識していたように感じられる。

しかしその一方で、例えば「絵本に音をつける」活動のみでは、ここで考えられる表現方法の気づきや聞き手と話し手との相乗効果などに視点を置くことはできなかったのではないだろうか。表現活動というものが、何をきっかけとし、何を媒体として行うものなのかは、限定されるものではない。同じ活動を行ったとしても、そこに関わるひとつの要素が変われば、同じものは生まれないということである。これが保育現場に立てば、これらに気づくには、ひとつの行為、活動に対して、「表現」という観点がちりばめられている、との視点で振り返ることができた時に、そこに「表現活動」があることに気づけるのである。これは表現活動に限ったことではなく、「環境による保育」「5領域による総合的な保育」においても、保育者がすべての活動に総合的な視点を持ち、自己の保育を評価する視点を常に持つためにも、振り返りの重要性を授業で伝えていく必要を強く感じた。

また実際、各保育者養成校でも開講されている「音楽表現」「造形表現」「言語表現」「身体表現」等の言語で表されるものだけが表現と認識してしまいがちだが、「表現とは何か」という根幹についても考える授業は必要ではないかと考える。それは多くの保育現場での保育者にも考えてほしい点である。

また今回の授業で特に明らかになった「間」による表現とは、大変興味深い点である。「音表現」の中の音のない部分である。これが、どのように表現されるのか、どのタイミングで表現されるのかが、一瞬の違いによっても完成の様子が異なる。空間の問題なのか、時間の問題なのか、この「間」と感じる力はどこから来るのか、など今後の研究課題としたい。

#### <参考文献>

- ・厚生労働省、「保育所保育指針」、2018
- ・文部科学省、『幼稚園教育要領』、2018



寄 ゆかり

- 内閣府, 『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領』, 2018
- 大場牧夫, 『幼児教育の基本を考える』, ひかりのくに株式会社, 1998
- 大場牧夫, 『表現原論 幼児の「あrawし」と領域「表現」』, 萌文書林, 1996
- 無藤隆監修, 吉永早苗著, 『子どもの音感受の世界—心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探究』, 萌文書林, 2016
- 寄 ゆかり, 「保育者養成校での『保育内容・表現』における音楽教育の位置づけ」, 『大阪千代田短期大学研究紀要』第46号, 2016